

戦後70年 生きる伝える

第3回 学校①

1945年8月15日、太平洋戦争の終戦を迎え、ことし、その日から70年の年月を経ました。終戦直後に生まれた人も70歳という年齢を迎え、戦争の記憶も薄れていくばかりです。幼い頃に戦争を体験した成田市平和啓発推進協議会・戦争の語り部の皆さんから当時の生活の様子を聞き取り、今後、二度とあのような悲惨な戦争を繰り返すことのないため、ここに紹介することとなりました。

戦

争が続いていた時代、尋常高等小学校から国民学校と名称が変わった。授業は修身(旧制の小中学校の教科目の一つ。道徳教育が中心)や歴史に力を入れるようになった。国語の教科書に載っている内容は国民の士気を鼓舞するようなものが多くなり、音楽の時間には勇ましいものが歌われるようになった。

学校には四大節^{しだいせつ}と呼ばれる祝日があった。祝日といっても休日ではない。式典に出席するため登校した。「新年」、「紀元節」(現在の「建国記念の日」)、「天長節」(昭和天皇誕生日、現在の「昭和の日」)、「明治節」(明治天皇誕生日、現在の「文化の日」)である。各学校では、教頭先生が白手袋をはめ、菊の御紋章の入った紫色の布を「教育勅語」に掛けて恭しく運び、モーニング姿に白手袋をした校長先生が奉読した。生徒たちは頭を下げてそれを聞いていた。

通学は、集団登校が基本だった。肩から掛けたかばんには、薄っぺらい教科書、筆記用具。運動靴などはなく、学校へ行く際は下駄か草履。途中で鼻緒が切れると泥んこ道や草の生えた道を素足で歩いていった。一日のうちに何度も鳴る空襲警報。防空頭巾は片時も離すことができない。母親が着物を解いて作ってくれた防空頭巾。それを必ず肩から掛けていた。通学途中でも空襲警報が鳴れば、上級生は下級生を防空壕や近くの中、木の下に避難させなければならない。いつも危険と隣り合わせの学校生活だった。



勤労奉仕活動で縄なう子どもたち(日暮和子さん提供)

各学校には足洗い場が必ずあった。体操の時間や休み時間には、裸足で運動場を駆け回り、終わると足洗い場に走り、足を洗って教室に入った。勉強するにもノートが足りない。ざら紙(わら半紙)の両面を使った。鉛筆が短くなると、割いた篠竹で挟んで使った。当時、豊住小学校へ通っていた日暮淑さんは、誰の鉛筆が一番短いかをよく競ったそうだ。

戦争が激しくなると、九十九里海岸から敵が上陸してくるので、兵隊がどの学校にも配属された。教室は足りなくなり、午前と午後に分かれて2部制で授業が行われるようになった。低学年は緑陰学校^{りよく}とあって、神社や寺の庭で授業を行った。高学年は授業の代わりに勤労奉仕活動が多くなった。男子は松根油掘り^{しょうこんあぶら}、女子は桑の皮むきや軍馬に食べさせるための干し草作りをした。さらに学校の校庭は大豆や麦、サツマイモなどの畑となり、毎日、畑の草取りや肥やし運びをした。

そんな中、唯一の楽しみは昼のお弁当。ただし、お弁当といっても今のように卵焼きやから揚げなど色とりどりのおかずなど入っているわけもなく、アルマイトの弁当箱に白飯を詰め、梅干しを真ん中に載せただけの、いわゆる日の丸弁当。しかも、白飯ならまだ良い方で、ほとんどが麦飯だった。米がないときは、新聞にくるまれた、ふかしたサツマイモだけがかばんに入っていることもあった。

全ての国民が国のために身をささげることが求められた時代。戦時中に小学校へ通っていた語り部の方たちは、学校で授業を受けた記憶は少ないという。彼女たちにとって、当たり前のように教育を受け、おいしい給食を食べられる今の学校制度はうらやましいことだろう。

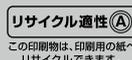
編集後記

この時期、あちこちで耳にした目にしたのが「○○の秋」という言葉。○の中に入る言葉はさまざまですが、わたしの場合は「スポーツの秋」でしょうか。「スポーツの秋」は1927年9月25日の朝日新聞で初めて使われ、1964年に東京オリンピックが開催されたのを機に定着したようです。これからスポーツイベントがめじろ押し。そろそろわたしもロードバイクを引っ張り出して、遠出の計画でも立ててみるとしますか。

平成27年10月15日号 No.1301

成田市のホームページ

<http://www.city.narita.chiba.jp>



広報なりたは、グリーン購入法に基づく基本方針の判断基準を満たす用紙、誰にでも読みやすいUD(ユニバーサルデザイン)フォントを使用しています。